

江戸時代の参勤交代

ところで江戸幕府は、全国の大名に対して 1 年おきに一年間江戸に住むことを義務付けていました。このことは教科書にも記載のある、いわゆる参勤交代です。この制度の目的は、筆者が学生のころは「地方の大名にお金を使わせ、幕府に逆らう力をつけさせないため」という見方がされていましたが、学校の先生からも確かにそのように教えられた記憶があります。正式な制度としては 1635 年、三代将軍徳川家光の時代に、武家諸法度の第二条に追加された制度です。地方と江戸の間を往復させるだけでなく、大名の妻子を江戸に住ませて、いわば人質にして謀反を起こさせないためと考えられていました。仙台藩の場合、江戸への旅は毎回 4 月、5 月ごろに行われていたようです。今の時代であれば、「不適切にもほどがある」と言わざるを得ないこの制度ですが、現在、参勤交代についての歴史的解釈は、筆者が学生の頃とは異なる目的であったとの解釈が浸透しています。そもそも、この参勤は、幕府が強制して始まったものではなく、当初はむしろ大名たちの方から率先して江戸に赴くという自然発生的なものだったようです。諸国の大名たちは、自分は徳川の味方です、ということ積極的にアピールするために参勤交代が制度化される前から江戸に参府していたのです。今から 40 年以上前の 1983 年の東京大学の日本史の入学試験の問題では、既に参勤交代の目的について次のような問題が出題されていました。「参勤交代が、大名の財政に大きな負担となり、その軍事力を低下させる役割を果たしたこと、反面、都市や交通が発展する一因となったことは、しばしば指摘されることである。しかし、これは、参勤交代の制度がもたらした結果であって、この制度が設けられた理由とは考えられない。」どうして幕府は、この制度を設けたのか。戦国末期以来の政治や社会の動きを念頭において、150 字（句読点も 1 字に数える）以内で説明せよ。」という問題が出題されたことがあります。この問題文の下線部からわかるように参勤交代の目的が地方の大名の軍事力低下が目的であったという考え方をこの問題文では明確に否定していると読み取れます。ただ、この問いについて何を書けばよいのか、少し難しい気もいたします。さすが東京大学の入試問題といった感じです。及第点がもらえるかどうかは分かりませんが、筆者の考えでは、参勤交代が武家諸法度で制度化された三代将軍の徳川家光の時代がどんな時代であったかを説明しながら将軍の立場からどんな世の中にしていきたいかそのために何を諸大名たちに期待したのかその意図を簡潔に説明しなくてはならないのだろーと思います。三代将軍の家光の時代は混迷を極めた戦国の世が終わった平和の世であり、家康が駆け抜けた時代のように将軍と共に戦うという機会は既になくなっていったと思われます。合戦が無くなった平和の世では、共に野山を駆けまわり戦うことで深まった絆（主従関係）を確認する機会がなくなりますので、争いがなく、幕藩体制をより強固なものとするためにも地方から家臣を率いて将軍（江戸）の元に参集する機会を意図的に作りだし、主従関係を確認する機会を作ること、そして争いの芽を摘むために、大名を江戸に置くことで諸国の領民と大名の関係を切り離してい

くことを参勤交代は意図していたのではないかと考えられます。したがって、この年の日本史選択の東大受験生は、このような状況を指定の文字数で記述できれば良かったのではないかと考えられますが、いずれにしても出題当時の歴史観では、学校の先生から聞いていた藩財政の困窮化説とは異なる内容を答案用紙に書くというのは勇気のいることだったのではないかと推察しています。問題文をきちんと読めていない学生や歴史を単なる暗記科目として捉えているような学生には赤門をくぐらせないという強い意思を感じる出題でした。

ちなみに東京大学の本郷キャンパスは、そのほとんどの部分が、加賀 100 万石として知られる現在の石川県と富山県に位置する藩で初代加賀藩主・前田利家が拝領した江戸屋敷のあった場所になります。本郷キャンパスのキービジュアルである赤門や三四郎池も大名屋敷であったことを偲ばせる歴史的遺構です。

武家諸法度以前の参勤は、大名が自然発生的に江戸に来ていたもので、家康も大名が来れば大いに歓待して、江戸市中に屋敷地を与えた。ということだったようです。豊臣秀吉の時代にも大名の正室と嫡子を人質にするように求めていたのでこれについては豊臣の時代から引き継がれたものであるようです。徳川家康も大名が江戸に出て来ると、最初は譜代大名の屋敷に泊め、帰るときには屋敷を建設する敷地を与えます。こうして江戸の街には諸大名の屋敷が建ち並ぶようになったということのようです。参勤した諸大名も將軍様からいただいた土地を放置しておくわけにもいかず、お金のかかるいただきものをしてしまったものです。最初の頃の参勤（「挨拶」「御礼」）は、家康を「恐れる」大名あるいは家康を「慕う」大名たちが自発的に行っていたものでしたが、多くの大名がこれをするようになると、他の大名たちも同じことをしなくてはならない空気となり、全国のほとんどの大名が江戸に行って將軍に挨拶・御礼をすることが武家諸法度で正式に制度化される以前から慣例化していたようです。横並びの意識はこの時代からもある日本人の思考パターンなのでしょうが、お金がかかるからみんなで一斉にやめようぜとは誰も言い出さなかったことからすると、参勤することで各藩の大名も何らかのメリットを感じていたのではないとも考えられます。例えば江戸にいと幕府や世の中の情勢についての情報に触れることができるなど。参勤交代が制度化されたのは、三代將軍徳川家光の時代の武家諸法度の改正によるものですが、参勤交代が始まった当初は全ての大名が対象ではなく、外様大名だけが対象でした。それが、1642 年になると親藩や譜代大名にも江戸参勤が義務づけられるようになりました。以後、諸大名は原則として 1 年間は江戸に在府し、その翌年は国元にいるという生活を送るようになります。幕府からは藩主とその家臣が住むために複数の江戸屋敷を与えられることになりましたが、常に江戸に住むことを求められた藩主の妻子が住む屋敷地も与えられました。東京大学の入学試験問題にもあったように参勤交代により街道の整備が進みます。特に日本橋を起点とした東海道は、全国の名名の過半にあたる 146 もの名名が参勤の際に利用したようです。参勤交代の時期やルートは、事前に各大名が幕府にお伺いをたて、幕府から指定されます。同時期に同じ街道で他の大名行列とかち合うことを回避するために事前に調整されていたようです。加賀藩の場合、最盛期には 1 回の名名行列で 4 千人にもなったようです。街道

の宿場にもキャパがありますから複数の大名行列が同じ街道を同時に利用することはできなかったと思われますので、幕府による事前調整は、大事なプロセスでした。

江戸参勤は各大名にとっては晴れ舞台で。庶民にとって大名行列を見ることは娯楽のひとつでもあったようです。大名は、できるだけ見栄を張り、国を出るとき、江戸に入るときには、多くの人数を従えているように見せるため、本当の藩士だけでなくエキストラも雇い入れていたようです。エキストラの人材を派遣することを商売とする者さえいたようです。それだけ多くのお金をかけて地方の大名は江戸との間を往復していたようです。そんな江戸屋敷は、目的に応じて複数の種類があり、また、常に同じ場所というわけではなく、屋敷替えということもしばしば行われていたので、藩主の住む上屋敷が転々とする藩もありました。

都心部には大名屋敷だった場所がたくさんあります。それを把握したうえで散歩されてみてはいかがでしょうか。